



1. 第30回全国大会・開催報告（2022年11月5日(土)、オンライン開催）

2022年11月5日(土)、オンラインにて、第30回全国大会が開催されました。ご参加頂いた多くの方々、開催に当たりご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。以下にて、大会プログラムの概要をご報告いたします。

<開会式> 9:20~9:30 開会挨拶：本田正美（全国大会実行副委員長）

<研究発表会> 午前の部：

第1セッション（9:30~11:30）：「情報と地域」4件

（11:30~13:10：昼食休憩）

<総会> 13:10~13:40

<研究発表会> 午後の部：

第2セッション（13:50~15:20）：「情報と文化」3件

第3セッション（15:30~17:30）：「情報と社会」4件

<閉会式> 17:30~17:40

閉会挨拶 須藤 修（情報文化学会 会長、全国大会実行委員長）

2. 情報文化学会第42回役員会および第30回通常総会について（オンライン開催）

1号議案 2021年度事業報告案および収支決算案に関する件

事業報告案[報告事項]

1. 2021年度全国大会の開催、2. 委員会・支部・部会の活動、3. 学会誌の発行、4. ニュースレターの発行、
5. 学会 Web サイトの運営、6. 学会賞の贈賞、7. 会員数の状況（2020年9月時点）

収支決算案[報告事項] 2021年度 収支決算書（自2021年4月1日～2022年3月31日）

2021年度 収支決算書

2021年4月1日～2022年3月31日

収 入 の 部	金 額 (単位:円)	差 額 (予算-実績)
1. 入会金・年会費	968,000	-632,000
2. 広告協賛金	0	0
3. 全国大会参加費等	0	0
4. 学会誌採録料	10,000	-70,000
5. 雑収入	18	—
6. 前期繰越金	4,232,834	—
収 入 合 計	5,210,852	-702,000

支出の部	金 額	差 額
1. 印刷製本費	1,028,715	171,285
2. 事務処理費	3,604	36,396
3. サーバルレンタル費	40,546	19,454
4. 発送費	89,898	30,102
5. 交通費	0	50,000
6. 会議費	10,000	20,000
7. 消耗品・雑費	13,327	16,673
8. 全国大会運営費・会場会議費	0	100,000
支 出 合 計	1,186,090	443,910

2022年3月31日現在

資 産 状 況	
現 金	0
銀行預金・郵貯貯金	4,024,762
合 計	4,024,762

第 2 号議案 2022 年度 計画案および収支予算案に関する件

事業計画案[審議事項]

1. 2022 年度全国大会の開催、2. 委員会・支部・部会の活動、3. 学会誌の発行、4. ニュースレターの発行
5. 学会賞の贈賞、6. 会員数について

2022年度 収支予算書

収入の部	金 額 (単位：千円)
1. 入会費・年会費	¥1,600,000
2. 広告協賛費	¥0
3. 全国大会参加費	¥0
4. 学会誌採録料	¥80,000
収入合計	¥1,680,000

支出の部	金 額 (単位：千円)	備 考
1. 印刷製本費	¥1,200,000	学会誌・予稿集他
2. 事務処理費	¥35,000	
3. 通信費	¥55,000	サーバレンタル・管理費他
4. 発送費	¥120,000	学会誌等封入発送費他
5. 交通費	¥50,000	
6. 研究・会議費	¥50,000	支部活動・委員会等
7. 消耗品・雑費	¥30,000	
8. 全国大会運営費	¥50,000	オンライン開催に関する経費等
会場会議費	¥0	オンライン形式のみのため
計	¥1,590,000	

情報文化学会役員(暫定)
(任期2022. 11. 5～2025. 10大会当日)

No	理事 担当業務	担当者
1	学会長、全国大会実行委員長、学会誌編集委員	須藤修(中央大学教授)
2	名誉会長、学会誌編集委員	片方善治
3	学会誌編集委員長、中部支部長	吉田友敬(名古屋文理大学教授)
4	総務委員会委員長、全国大会副実行委員長、学会誌編集委員	平澤洋一(広島大学客員研究員)
5	会計委員会委員長、会員管理委員会委員長、学会誌編集委員	大久保博樹(駿河台大学教授)
6	支部・研究部会総括、学会誌編集委員	伊藤直哉(北海道大学大学院教授)
7	ニューズレター編集委員会委員長、広報委員会委員長、北海道支部長、学会誌編集委員	辻本篤(北海道大学大学院教授)
8	関東支部支部長、学会誌編集委員	稲垣秀人(東京経済大学特任講師)
9	関西支部支部長、学会誌編集委員	稲垣耕作(国際情報学研究所長)
10	九州支部支部長	飯村伊智郎(熊本県立大学教授)
11	データベース委員会委員長、学会誌副編集委員長	遠山茂樹(高知大学教授)
12	国際研究交流委員会委員長、学会誌副編集委員長	李穎清(城西国際大学准教授)
13	顕彰事業選考委員会委員長、MOT部会会長	安岡寛道(明星大学教授)
14	学会誌編集委員	松永公廣(Learning Media 工房)
15	学会誌編集委員	安田孝美(名古屋大学大学院教授)

No	評議員 担当業務	担当者
1	東北支部支部長	堀川三好(岩手県立大学教授)
2	関東支部副支部長、学会誌編集委員	本田正美(関東学院大学客員研究員)
3	中部支部副支部長、学会誌編集委員	浦田真由(名古屋大学大学院准教授)
4	関西支部副支部長	横山宏(大阪電気通信大学大学院准教授)
5	九州支部副支部長	武田和大(鹿児島高専准教授)
6	全国大会プログラム委員会委員長	山下倫範(立正大学教授)
7	データ管理委員会委員長	寺本卓史(城西国際大学教授)
8	選挙管理委員会委員長	中野邦彦(武庫川女子大学准教授)

No	担当業務	担当者
1	会計監事	坂本眞一郎(常葉大学教授)
2	会計監事	藤本孝一郎(城西短期大学准教授)

3. 2022 年度 支部・部会報告

- ・中部支部 研究会

【日時】：2022 年 12 月 24 日（土）10:00～，【会場】：相山女学園大学 星ヶ丘キャンパス／オンライン

- ・九州支部 大会

【日時】：2023 年 2 月 11 日（土・建国記念日）12:50～16:30，【会場】：オンライン

- ・関東支部 研究会

【日時】：2022 年 2 月 26 日（日）13:15～16:15，【会場】：三鷹市市民協働センター

4. 第 31 回 全国大会開催のご案内

第 31 回全国大会は **2023 年 11 月 18 日(土)** に開催いたします。発表のエントリー方法、発表原稿等の受付方法は下記をご参照ください。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

4.1 統一テーマなど

* 統一テーマ： 未定 （決定次第、発表します）

- *日 程： 2023 年 11 月 18 日（土）
- *プログラム： 開会式，研究発表，役員会，総会，閉会式
- *会 場： オンラインでの実施
- *大会参加費： 不要

4.2 発表のエントリーについて

(1) エントリー期間／受付先

- ①受付期間： **2023 年 8 月 22 日（火）～ 9 月 23 日（土）** * 注意：この期間以外での受付は一切致しません。
- ②受付先： taikai@jouhou-bunka.jp （全国大会 発表申込・受付担当 平澤宛）
- ③申込方法： エントリー時に発表予稿論文を提出のこと。

(2) エントリー資格について

- ①著者のうち少なくとも一名は本学会の会員である必要があります。
- ②学部生や大学院生が第一著者や登壇者になることは妨げませんが、その場合には、エントリー時に指導教員の連絡先も対応責任者の連絡先と合わせて届出して下さい。
- ③一人で複数の発表の第一著者や登壇者になることは認めません。複数の発表の共著者になることは妨げません。

(3) 提出物：「発表予稿論文」

- ①メール本文に「対応責任者の連絡先」を明記して下さい。以後のやりとりは対応責任者の方と行います。
 - ②提出後の変更は一切受け付けません。
- ※発表の順番・時間帯についての希望も受け付けません。

(4) 発表予稿論文について

- ① 原稿の様式： A4 で 2 枚～4 枚 「MS-Word 版」と「PDF 版」、両方を提出
- ② 形式は自由（ただし、論文形式であること）。カメラレディ版での提出をお願いします。
- ③ 提出原稿につき、形式上・内容上で本大会の趣旨から著しく逸脱したものと実行委員会が判断した場合には、発表を受け付けないことがあります。

5. 『情報文化学会誌』への論文投稿

<各号の締切日>

各巻第 1 号への投稿：3 月 15 日（消印有効）

各巻第 2 号への投稿：7 月 10 日（消印有効）

詳細は、学会ウェブの下記「学会誌」のページ、および下記「投稿規定」をご参照ください。

（「学会誌」のページ：<http://jouhou-bunka.jp/journal>）

（「投稿規定」：<http://jouhou-bunka.jp/wordpress/wp-content/uploads/2019/03/tokokitei210322-2.pdf>）

6. 「JICS 便り」名誉会長 片方 善治 — 「《責任ある AI》と情報文化学」—

21 世紀に入ってから情報社会は新段階に突入した。SNS の展開で個人が情報発信者となった事だ。かつてない通信の世界が実現した。スマホは生活と企業活動を一変させた。2012 年になると AI 研究で画期的な成果が上がり、大手企業のデータドリブンの激しい競争は人々の思考や行動を左右するようになった。利便性が拡大する一方で、社会の混乱や分断を招いた。

2023 年になると、AI は人間のように自然な回答をする対話型 AI (ChatGPT) が生成 AI と呼ばれ普及するようになると、社会への影響が無視できない状況が急浮上した。先進諸国はこぞって「責任ある AI」の実現に立ち上がった。だが規則に動く欧州と利活用を探る日本とは同床異夢の構図がある。テクノロジーには利便性と危険性の両刃がある。この特徴を抑制するのは広い意味の文化である。情報社会が情報テクノロジーに傾斜していたとき、情報文化学会が創立したのは、学際的な情報文化学の体系化を目的としたからであった。「責任ある AI」に本学会の果す役割を認識すべきである。